

留学生のための物語日本史

第 12 話 織田信長

鉄砲隊が馬防柵（ばぼうさく）¹の内側にずらりと並んでいた。

「武田と正面から戦えるとは、思わなかったのう」

尾張の一弱小大名からのし上がった織田信長（おだのぶなが）には、自分で自分が信じられないといった感じであった。周囲は朝の静寂がピーンと張り詰めており、虫も音を立てないような状況である。

「信長様、まだ武田は動く気配がありません」

少々遠いが、武田勝頼（たけだかつより）の軍がすべて馬を揃えて、こちらに向かう準備をしている。信長の正面にいるのは誰かわからないが、しかし、山形昌景（やまがたまさかげ）の赤備え（あかぞなえ）²だけは、緑と黒を基調にした風景の中で、ひとときわ燃えあがる炎のように目に入った。

「まだ幟（のぼり）³が横に動いておる。もう小半時（こはんとき）⁴は動かぬであろう」

信長は、落ち着くために床几（しょうぎ）⁵に腰を下ろした。

ここは遠江国・長篠地区、現在の静岡県新城市である。武田信玄（たけだしんげん）の死の翌年、息子勝頼がすぐに動き出し、徳川家康（とくがわいえやす）の家臣、奥平貞昌（おくだ

1 馬防柵 …木を組み合わせ、縄で縛りつけて固定した馬を防ぐ柵。

2 赤備え…戦国時代の軍団編成の一種。あらゆる武具を朱塗りにした部隊編成で、戦場で目立つため、武勇に秀でた武将が率いた。

3 幟…目印のための旗。

4 小半時…現在の30分。

5 床几…第11話、脚注2を参照。

いらさだまさ) の守る長篠城を取り囲んだ。その時を待っていた織田信長は、徳川家康を従えて、3000丁の鉄砲を要した大軍団を率いて、ここ連子川の前に馬防柵を築き、その内側に鉄砲隊を3列に並べたのである。

「しかし、横に動いているということは、これからこちらに来るということだ。準備を怠らぬようにせよ」

「はっ」

部下たちは鉄砲を手入れし、そして弾を込めていた。

果たして小半時経つと、武田陣営からホラ貝の音が鳴り、そして大地を揺るがすような馬の足音が地鳴りのように響きわたり、近づいてきた。

「よく引き付けてからだ、柵がある。安心せよ」

信長は自分に言い聞かせるように大きな声で言った。

「馬上の者の顔が見えたら撃て、よいか」

そして大きく采配(さいはい)⁶を天に向けて振り上げると、号令をかけた。

「撃て」

1000丁の鉄砲が一斉に火を吹く。その音は、馬の足音をすべてかき消し、そしてドンという大きな破裂音で空気を切り裂いた。武田軍の騎馬隊はほとんど馬から落ちた。すべて弾が当たったわけではない。弾が当たって落ちた者もいるが、それ以上に火薬の一斉の破裂音に驚いて馬がいななき、上に乗っていた武将をたたき落とし、そして逃げる態勢となったのだ。

武田軍は、一瞬のうちに混乱状態になった。今まで馬が自分たちの言うことを聞かないなどということはなかった。馬が逃げまどい、大混乱してしまっている。馬から降りれば、今まで自分が乗ってきた馬にけられて、敵と戦う前に自分がけがを負ってしまう。そのように考えている間に、次の鉄砲玉が彼らをかすめたのである。そして、そのあと柵の横からたくさんの織田の雑兵が槍を突き出してきた。武田軍は次々と屍の山を築くしかなかったのである。

⁶ 采配…昔、戦場で大将が手に持ち、指揮するために振った道具。

「大勝利、おめでとうございます」

真っ先に信長のもとに駆け付けたのは、以前まで木下藤吉郎（きのしたとうきちろう）と名乗っていた羽柴秀吉（はしばひでよし）である。信長はその顔から「サル」と呼んでいた。

「おう、サルか。ご苦労」

「お褒めの言葉をいただき、誠にありがとうございます」

「お前だけ褒めているわけではないわ」

信長は、なんとなく笑ってしまう。羽柴秀吉は、ほかの武将が同じことを言えば、絶対に激怒されるようなことを平気で口にし、そのうえ信長の笑いをとる。不思議な能力を持っているのである。

「いやいや、やはり信長様のお力でございます」

褒められて嫌な気分になる人はいない。信長も同じことだ。目の前で首実検（くびじっけん）⁷を行っている最中、「それにしても武田の軍勢は、鉄砲にひるまず、まっすぐに柵に向かってまいりました。いやいや、恐ろしかった」

と、宿老（しゅくろう）⁸の佐久間信盛（さくまのぶもり）が言うと、信長の目が不気味にきらりと光った。

「信盛、そのほうは武田が怖かったか」

「いえ、さようなことを申し上げているのでは、ございません」

「それならよいが、戦の真ただ中で敵を恐れるような者が、この信長の家中にいるとあつては織田家の名折れになるからの」

佐久間信盛は、この後、突然信長から糾弾され、織田家を追放されてしまう。

「しかし、武田は本当にまっすぐに向かってまいりました。あれが武田の戦法だったのでしよう」

⁷ 首実検…配下の武士が戦場で討ち取った敵の首の身元を大将が判定し、その配下の武士のでがらを認めるために行われた作業。

⁸ 宿老…古くからの家臣、重要な地位につく者の称。

秀吉は、佐久間を守るつもりではないが、そのように言った。

「サルはそう思うか」

「はい、恐れながら。武田軍は伝統と、自分たちが勝ってきた実績がありました。それだけに、今までの戦い方を変えるわけにはいかなかったようでございます」

「なるほど」

「信長様は、さすがに素晴らしく、武田のまっすぐに走ってくる馬に対して、鉄砲で一気に殲滅（せんめつ）し、混乱した馬の中に槍を突き立てて敵を倒す。武田信玄公以来の武田軍の伝統的な戦い方を研究され、騎馬隊を避ける柵と、そして馬を混乱させる鉄砲で相手を弱らせる。伝統と実績をこえる信長様の頭脳は素晴らしいと、感嘆しておる次第でございます」

見え透いた秀吉のお世辞に信長よりも、そこにいた佐久間信盛や柴田勝家（しばたかついえ）といった宿老がみな嫌な表情を浮かべた。

「これで、足軽の鉄砲が名のある武将を倒すような新しい時代が来たわけです。そうですね、信長様」

「サル、なかなかよいところに目をつけておる」

「私からもよろしいでしょうか」

声を上げたのは、秀吉の前に座った明智光秀（あけちみつひで）であった。彼は、その頭の形状から、信長には「キンカ頭」⁹と言われていた。非常に頭もよく、また分析力も鋭いのであるが、その態度が礼儀正しく、なおかつ物言いが理屈っぽいので、秀吉とは対照的に、何を言っても嫌われるタイプである。

「キンカ頭、何が言いたい」

「はっ。信長様は、このような戦いをするために、多くの足軽の部隊をお作りになりました」

「おう」

ちょっと雰囲気は陰悪になる。光秀が話し始めると、信長は途端に表情が硬くなるからだ。

⁹ キンカ頭…金柑頭とも書く。はげ頭、金柑のような形の頭のこと。

しかし、光秀はやめない。

「今回、信玄公であれば、柵を目の前にして全軍を前に出すようなことはしなかったでしょう。農閑期のうちに戦を終えなければなりません。しかし、信長様は、軍と農民を分離されたので、農業の時期と関係なく兵を動かすことができます。その余裕と、一方で農繁期までに戦を終えなければならない武田勝頼とでは、当然に戦い方が変わったということになります」

「それがどうした」

「続けます。兵を農業に結び付けないことは、そのまま兵に給与を払うということになります。そのために大量の資金が必要になります。信長様はそこまで計算されて、楽市楽座（らくいちらくざ）¹⁰を領内のすべての市で実践されました。その資金は、鉄砲をこれだけ揃えるのに十分なものであったかと」

「キンカ頭、くどい」

信長は褒められているのに、なぜか自分を見透かされ、分析されているような、何とも言えない不快感を感じた。

「いやいや、信長様のそのような新たな試みこそ、この戦国の世を終わらせる知恵かと思われま。この家康、しかと肝に銘じておきます」

なんだか居心地の悪い空気を察して、三河の徳川家康が口をはさんだ。そこに居並ぶ人々はみな、徳川家康の言葉になんとなく助けられた気がした。家康は信長の武将ではなく、正確に言えば同盟軍である。信長も家康には特別な配慮をしている。その家康が、このような気まずい空気の中で声を出してくれるのは、ほかの武将にとっては助かるのである。

「家康。そのほうは、これで武田が攻めてくることもなくなったであろう」

「ところで、信長様にぜひともお目通り願いたい者がおります」

「ほう、家康が人を会わせたいとは」

¹⁰ 楽市楽座…安土桃山時代、織田信長、豊臣秀吉の豊臣政権や各地の戦国大名などにより、城下町や支配地の市場で行われた経済政策。特権をもつ商工業者を排除して自由取引市場を作った。「楽」とは規制が緩和されて自由な意味。

「こちらへ」

帷幕（いぼく）¹¹の外から、一人の甲冑をつけた武者が入った。

「奥平貞昌にございます」

戦場であるので、徒立（かちだ）¹²のまま頭を下げた。

「おお、そのほうが。長篠城では苦しい思いをしたであろう、よう耐えた。褒めて遣わす」

「ありがたき幸せ」

奥平はこの時になって、やっと片膝をついた。この時代、片膝をついた座り方をするのは、突然敵に襲われた時でも、自分の身を守るためである。

「褒美として、といっても家康の家臣だから領地などを渡すわけにはいかぬのでな。まずそのほう、私の『信』の字を使うがよい。これから奥平信昌と名乗れ。家康。、どうじゃ」

「私からもお礼申し上げます」

家康は、その場で頭を下げた。

「それと」

信長はあたりを見回すと、横に建ててあった刀をそのまま手につかみ、奥平信昌のところに向かった。

「これを使うがよい」

奥平は、その刀を押し頂いた。

「さて、次の首実検は」

「山形昌景にございます」

「なかなか手ごわい男であった。歳はいくつじゃ」

「聞くところによると47と聞いております」

信長は、戦が始まる前の、赤備えの一群が動く光景を思い出した。あの赤い軍団が火の玉の

¹¹ 帷幕…垂れ幕と引き幕。戦場における陣営のこと。

¹² 徒立ち…騎馬でなく、徒歩であること。

ようにこちらに向かって来る光景は、負けはしなかったものの、さすがに忘れられるものではない。

「人間五十年、化天のうちを比ぶれば、夢幻の如くなり

一度生を享け、滅せぬもののあるべきか

これを菩提の種と思ひ定めざらんは、口惜しかりき次第ぞ」（幸若舞「敦盛」の一節） 信長はいつの間にかそうつぶやいていた。

信長は優れた武将で、その手法は光秀の言うように改革的で、なおかつ因習にとらわれない合理的なものであった。そのため宗教的な対立なども少なくなく、本願寺（ほんがんじ）や比叡山（ひえいざん）との闘いは、長年に及ぶこととなるのである。

しかし、そのようなことからか、この「長篠の戦い」の数年後、もともと伝統を重視する明智光秀が、突如信長に叛旗（はんき）を翻し、「本能寺の変」で稀代の革命児はこの世から姿を消すことになる。

伝わるところによれば、信長は死ぬ間際、幸若舞（こうわかまい）¹³の「敦盛」¹⁴を謡ったといわれている。信長もこの歌のとおり49年の生涯であった。

¹³ 若幸舞…室町時代に流行した語りを伴う曲舞の一種。能や歌舞伎の原型ともいわれる。

¹⁴ 「敦盛」…幸若舞の演目の一つ。作者と製作年は不詳。平敦盛は平清盛の甥で、笛の名手でもあった。数え年16歳で平家一門として一ノ谷の戦いに参加し、源氏方の熊谷直実に一騎討ちにより戦死した。

第13話 徳川家康

「上野介、この後どうなる」

桃配山（ももくばりやま）¹⁵に陣をかまえていた徳川家康は、帷幕（いばく）¹⁶の軍師、本多上野介正純（ほんだこうずけのすけまさずみ）に声をかけた。本多正純は、家康が最も信頼する本多佐渡守正信（ほんださどのかみまさのぶ）の息子である。正純は正信と同様、三河一向一揆（みかわいっこういっき）¹⁷の時に一度、家康の元を逃げ出し、父と一緒に全国を周り、様々な知識を身につけて家康の元に戻ってきている。その智謀¹⁸は、父をしのぐとも思われていた。

「じきに戦（いくさ）が始まりましょう」

「そんなことは、分かっている。そうではない、秀忠はまだ来ぬのか。秀忠の主力がいない状態で石田三成（いしだみつなり）に勝てるのか、と聞いておる」

美濃国関ヶ原一 数日前まで、大垣城にこもる西軍諸将の軍を、家康はぼんやりと取り囲んでいた。西軍の石田三成にしてみれば、各地に放った軍隊が出てくるのを待つ時間がほしかった。一方、東軍の徳川家康も親藩・譜代が多い、主力を率いた息子秀忠の軍の到着を待って戦をしたかったのである。

しかし、家康は西軍が集まる、特に大阪城から、秀吉の遺児豊臣秀頼（とよとみひでより）が千成瓢箪（せんなりひょうたん）の馬印¹⁹をつけて出てくることを最も恐れていたのも、その前に石田三成を成敗しなければならない。東北の上杉景勝（うえずぎかげかつ）もそのままにしてきているので、気になる。待つという時間は家康にとっては敵でしかなかったのである。

¹⁵ 桃配山…岐阜県不破郡関ヶ原町にある標高104mの山。

¹⁶ 帷幕…第12話、脚注11参照。

¹⁷ 三河一向一揆…戦国時代に三河国で一向宗の信徒たちが起こした、権力に対する抵抗運動。家康に宗教の恐ろしさをまざまざと見せつけた。

¹⁸ 智謀…知恵のある、すぐれたはかりごと。

¹⁹ 馬印…戦国時代の戦場において、武将が自分の所在を明らかにするため武具などに付けた印。

「秀忠殿はまだでございましょう。秀忠殿は、時間が経って秀頼様が出てきた場合の危険性を全く分かっておりません。現在の東軍の主力、福島正則（ふくしままさのり）、黒田長政（くろだながまさ）、山内一豊（やまうちかずとよ）もいずれも太閤殿下の子飼²⁰。太閤の愛用していた千成瓢箪の馬印が出てくれば、わが軍の士気が一気に下がるどころか、裏切って西軍に付きかねない状態です。あくまでも、石田三成との戦いで済ませなければなりません…」

「そのほうの父、本多佐渡守が秀忠と一緒にいるではないか」

「父は、そこまで本音を秀忠殿には言いません。秀忠殿がそのことに自分でお気づきになるのを待つでしょう」

正純はそのように明け透けに言ってしまった。家康は、この正純がそのうち様々な武将とぶつかり、徳川家の屋台骨を揺るがすことが心配であった。正純は確かに頭がよい。しかし人間はどんなに正しい答えであっても、それを当然のこのように言われては腹が立つものである。まだ家康や本多正信が生きているから、そのような生意気な部分があっても多くの人が目をつぶっているが、しかし理屈だけ、正しさだけでは人の情が動かない。それでは摩擦が起こるのだ。

まさに、今対峙している石田三成がそのような男であった。正しければ、情を傷つけてもかまわない。その結果、豊臣家は子飼の武将がすべて西軍から離反し、東軍に付いているのである。彼らが西軍にいれば、このような戦にはなっていないであろう。

「もうよい。ところで、勝てるか」

「五分でございます」

「ほう、上野介の頭脳をもってしても五分か」

「申し訳ありません」

家康は、この時のことを思って、様々な政治的工作を行った。政治的工作は人の心の機微が分かった者しかできない。利で動く人間であるならば正純でも理解できるが、情で動く人間に

²⁰ 子飼い…初歩の段階から大切に育てること。また、その人。

対しては、正純ではだめなのだ。

家康を背後から狙っている毛利の軍は実質、吉川広家(きっかわひろいえ)が動かしている。その吉川広家には毛利家の存続のために、とにかく動くなど伝えてある。もちろん、浅野幸長(あさのよしなが)などの武将も備えてある。また、目の前の松尾山²¹にある小早川秀秋は気が弱い。そこに付け込んで様々に工作を行っている。

しかし、家康は政治的な工作を信用していなかった。強いほうに付いて家を残すのは、この時代では普通のことだ。東軍が弱ければ、当然に徳川との約束などはすべて忘れて、西軍として襲いかかってくる。

「殿、向こうで鉄砲の音が」

「始まったか」

黒田長政・細川忠興(ほそかわただおき)の軍と石田三成の軍がまず干戈(かんか)²²を交えた。藤堂高虎(とうどうたかとら)や福島正則は遅れてはならじと、果敢に小西行長(こにしゆきなが)・宇喜多秀家(うきたひでいえ)の軍にかかる。

「殿は、なぜこのような戦を」

「上野介、今なぜ、そのようなことを」

次々と戦況が伝えられるなか、本多正純はいきなり家康に聞いた。

「大きな戦をすれば当然に、実力で徳川家に天下が転がり込んでくる。その戦を仕掛けたと
いうことでしょうか」

「そうだ」

「では、なぜそのような戦をしようと思ったのでしょうか」

²¹ 松尾山…関ヶ原町の南部にある標高292.9mの山。眼下には関ヶ原市街地を一望できる。現在も土塁などの跡が残る。

²² 干戈…干(たて)と戈(ほこ)。武器、または武力のこと。

「信長様もそうであったが、戦のない世の中を作るために戦をしている。戦は人が死ぬ、それが嫌なのじゃ。信長様は戦をなくすために、戦になる世の中、つまり前の幕府を壊した。しかし、それでも大名がはびこっているのは戦が終わらぬではないか。そこで、太閤殿下が各大名を潰し、戦がない世の中を作ったのだ」

伝えられる戦況が芳しくないのか、家康は爪を噛み始めた。イライラすると爪を噛むのが家康の癖である。

「戦のない世の中ができたのに、なぜ殿は戦をしますのか」

「太閤殿下は戦をなくすと思っておった。しかし、太閤殿下は天下を統一したのち、そのまま朝鮮や明国を攻め始めたのだ。これで大きく考え方が変わった」

そうですか、と本多正純は代わりに大きくうなずいた。

「そこで戦を本当になくすためには、この家康が豊臣家に代わって、本当に戦のない世の中を作らなければならぬ。それをやっているだけだ」

「それでは、最後は大阪を滅ぼすおつもりで」

正純は何事もないかのように、やはり論理的に、正しい結論を言った。しかし、家康は眉をしかめ、正純を黙らせた。戦の最中に、それも太閤殿下の子飼いの軍が味方に付いているのに、太閤殿下の遺児秀頼を滅ぼすなどということは口に出せないのである。

「ごさかしい、黙れ」

「申し訳ございません」

正純は、さすがに家康の言うその意味が分かった。

「ところで、小早川秀秋が動かぬ。いかがいたしたらよいと思う」

「使者を出したらいかがでしょうか」

正純は合図ののろし²³を上げて動かぬ秀秋の軍に使者を立てろと言う。論理的には正しいが、しかし敵の本陣から使者が来たら、秀秋にうまくつながるものもつながらなくなってし

²³ のろし…合図や警報のために、たきぎ・火薬などを用いて高くあげる煙。

まう。「馬鹿者、まだまだ戦の現場を知らぬな」

家康は戦が始まってから初めて床几（しょうぎ）²⁴から腰を上げると、近くの部下にひとこと言った。

「本隊の鉄砲隊を100ほど、松尾山に向かわせよ」

「松尾山ですか、あそこは小早川秀秋殿の本陣ですが」

「裏切らぬならば敵だ、撃て」

「殿」

本田正純は、家康の言っている意味が分からなかった。今ちょうど勢力が張り合っている。この時に動かない敵の小早川軍を敵に回せば、かえって味方が不利になってしまうのではないか。逆に家康が攻めないことが、敵に小早川が寝返るのではないかという疑心暗鬼（ぎしんあんき）²⁵を生じさせることになるはずだ。

「それでよいのだ、敵は撃つ。それだけのことだ」

家康本隊の鉄砲隊は、松尾山の山麓から山上の小早川の本陣に向かって鉄砲を放った。

「い、家康は、私のことを怒っているのか」

気の弱い小早川秀秋は、急に叫び始めた。これまでのろしが上がって家康からは何度も裏切りの催促があり、一方で石田三成からは、何度も軍を動かすように言われていた。その板挟みにあって困り果てていた時に、家康の鉄砲隊から攻撃されたのである。

「私は、私は、敵ではない」

そう言うと、いきなり采配²⁶ではなく、腰に差した太刀を抜き、その抜き身をそのまま石田陣営のほうに向けた。

「石田を攻めよ」

²⁴ 床几…第1話、脚注2を参照。

²⁵ 疑心暗鬼…疑いの心があると、なんでもないことでも怖いと思ったり、疑わしく感じることのたとえ。暗闇にいないはずの亡霊が目に見えてくる意から。

²⁶ 采配…第1話、脚注6を参照。

「殿、西軍を裏切るのですか」

「うるさい、このままでは家康に攻め滅ぼされてしまう。怖い、石田を攻めよ」

ちょうど勢力が張り合っているところに、全く新手の小早川軍1万5000が西軍に向かって山を駆け下りた。もともと裏切りに備えて配備してあった脇坂・朽木・小川・赤座の各軍も小早川軍の勢いに押されて、そのまま西軍の陣営に横から槍を入れた。そのことを予想していた大谷刑部（おおたにぎょうぶ）は、乱戦のなか、腹を切って自害し、果ててしまったのである。

勝負は決した。

これが「天下分け目」といわれた関ヶ原の合戦である。

東西両軍の戦いは応仁の乱のように、このまま、また百年の戦国の世を作ると思われた。しかし、あまりにも圧倒的な徳川軍の勢いは、西軍にもう一度、戦をさせる力を与えなかった。実質的にこの戦で豊臣家から徳川家が、武士の棟梁としての地位を得ることとなり、関ヶ原の合戦の3年後、徳川家康は征夷大將軍となって幕府を開くことになる。徳川家康が思い描いた「戦のない世の中」を作る作業が始まったのであった。

その後、本多正純の言うとおりに、豊臣家は大阪の陣で滅ぼされ、徳川に対抗する勢力は完全になくなった。そして戦によらない、大名同士の紛争の解決方法を本多正純自身が演出する。秀忠の後の三代目將軍を決めるにあたり、正純が付いた、家光の弟の忠長一派はすべて疑惑をかけられて閉門蟄居（へいもんちつきよ）²⁷させられることになる。

宇都宮藩主本多正純は、三代目將軍を忠長にするため、釣天井を仕掛けて、秀忠を暗殺するのではないかという疑惑で、秀忠によって改易（かいえき）²⁸させられるのである。この時、忠長と家光の間で戦になるのではないか、など様々なうわさが流れたが、「改易」という方法で取り潰されて終わることになる。幕末まで、この慣習にしたがって、戦のない世の中になるので

²⁷ 閉門蟄居…江戸時代、武士に科せられた刑罰のひとつ。「蟄居」は虫などが地中に隠れている様子、「閉門」は門を閉じて人の出入りを止めること。

²⁸ 改易…江戸時代には大名の領地を没収し、身分を奪う刑罰を意味した。

ある。

これから260年の太平の世になることが、家康には関ヶ原の戦いの時に、すでに見えていたのであった。